
泣きボクロのある死神さんと私

ぱっつん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泣きボクロのある死神さんと私

【Nコード】

N6903G

【作者名】

ぱっつん

【あらすじ】

私が死の世界で出会ったのは、泣きボクロのある死神さん。その死神さんは私の最初で最期の好きな人。けれど、私と死神さんは、決して決して交わることはない。お互いが生と死の存在である限り・・・ 「変わり者の亡者と俺」とのリンク作。

私は、初めてここに来たときのやりとりを思い出していた。

『えーと・・・状況が理解できないのですが、とりあえずあなたは誰？』

『俺？俺は死神。ちなみにここは、あの世とか彼岸とか言われてるところ』

右目の下に泣きボクロのある死神さんは、そう言って私に笑いかけたのを覚えている。

初めは、この人の下で、今みたいに手伝うなんてこと考えもしなかった。

でも、天国に誘われて、行った先は正直つまらなかった。

平和が嫌いなわけじゃない。

けど、退屈はつまらない。

私と同じような亡者の人に話しかけても、返事が返ってくるのは一割二割。

死神さんいわく、天国は心地よすぎて、人としての感覚が鈍くなるらしい。

いわゆる、退化ってやつだろう。

生き物ってというのは、状況にあわせて進化と退化を繰り返してきた私達人間だって、木につかまる必要がなくなったから、尻尾が無くなった。

キリンとかだって、高いところの餌をとるため、首が長くなった。

思うに、天国は何もしなくて良い世界だから、何もしなくなったんだらう。

と、まあ天国がものすごくつまらなくなったら私は天使さんのところに言っただ喋ったり、花で輪をつくってみたりしたわけだが、どちらにしる簡単な暇つぶしにしかならなくて。

それで、いつの間にかこうやって手伝っている。一体何がどうなっただこうなっただらう。

いや、まあ、仕事は案外楽しいし、不満はない。

それに、私は正直、死神さんが好きだ。生きてるときはまったく恋愛沙汰なんてなかったのに好きになった。

だから好きな人の傍にいられて、嬉しいくらいだ。

「死神さん。死亡者リストの整理、終わりましたよ」

「お、ありがとう」

「いいえ」

嬉しいくらい、だけど。

こうやって死神さんの笑顔を見るたび、思う。

彼には永遠というものがあって、私にはない。

いつまでも、こうして一緒にいられるわけない。

それがたまらなく、切ないのだ。

「でも悪いね、唯^{ゆい}」

何がと思い聞き返すと、どうやら私に手伝いをさせていることからしい。

そんなこと、気にしないでほしい。

好きでやっているのは私なのだから。

私が、ちょっとでも一緒にいたくて、やっている自己満足だから。

「いいんですよ。それにどうせ、私が転生するまでですし・・・」
自分で言っつて、後悔した。

言葉にしてしまうと、よりリアルに感じてしまう。

転生してしまうことが、怖い。

いや怖いというより、不安？寂しい？悲しい？

この感情に言葉は付けられない。

何だろう、この感じは。

胸が締め付けられて、もやが広がっていくような、

心に鉛がたまっていくような、この気持ちの悪い感じは。

「転生といえば、俺、唯の前世について話したっけ？」

「はい。色々聞きましたよ」

もう忘れちゃったんですか、と言葉を付けると、死神さんは苦笑した。

死神さんは世界で初めて死んだ人間で、この姿は死んだときのまもらしい。

見た目で判断するなら、二十台後半辺りだろう。

歳かな、と言っつけれど見た目はだいぶ若い。

でも中身は何百年も何千年も過ぎてるんだよなあと思うと変な気分だ。

何千年も前の人間にしては現代社会の仕組みを知ってたり、

雰囲気は仙人みたいだけどくだけた言葉遣いだし。

西洋系の顔立ちでなくて、アジアっぽい顔立ちだけど、どこの国に

居た人なんだろうか。

(死後は言葉に日本語とか英語とかなく言葉が通じるらしい)
私って、やっぱり死神さんのこと、全然知らないんだよなあ。

「歳は関係ないと思います。

というかそんな莫大なこと覚えられるんだったら、細々としたこと
も覚えてください」

「それは違うな」。俺が魂のことを覚えてるのは死神だからだし」
いまいちよく分からない。

その後なされた死神さんの話を簡単にまとめると、
悪魔も天使も人のことイチイチ覚ええない(コンビニとかのバイトみ
たいだと思った)

けど、死神はイチイチ人のこと調べたりするから、憶えてしまう。

現代風に例えるなら魂は一個のファイルで、
新しい情報(「前世」)が入るたび上書き保存、みたいな感じかな。
で、死神さんはそれを全て覚えていると。

莫大、だと思った。

とてつもなく莫大で、果てしない記録。

死神さんは、そんな気の遠くなるようなことを1人で。

独りで、やっていたんだ。

「俺が唯という人間を覚えていても、唯は転生すると俺を忘れるだ
ろ」

だったら、だったら死神さんのことは誰が憶えていてくれるんだろ

うか。

お互いが生きてる間は、お互いのことを忘れないようにするのは不可能じゃない。

だけど、死んだら別。死神さんは転生しない死神で、私たちは転生する魂なのだ。

死神さんは私達一人ひとりをちゃんと憶えていてくれる。

けれど、私達は転生するたびに綺麗さっぱり忘れてしまう。

今の私だって前世の記憶がない。忘却は避けられないことなんだ。

私もし死神だとしたら、そんなこと、絶対に耐えられない。

もし死神さんが記憶喪失になって、私のこと忘れていたらって考えると、怖い。

ととてももおそろしい。

だって、死神さんは私の、最初で最期の好きな人だ。

初めて好きになった人であり、最期に好きになった人でもある。

だから、忘れてしまうことが、とてつもなく怖い。

「俺は思っただよね。どうして俺は死神なんだろうって」

「・・・」

「永遠なんてさ、気の遠くなる時間なんて、いらないんだ。

ただ、唯と同じ時を生きていたかったなあ」

その言葉が嬉しくて、同時にとても切ない。

私と死神さんは、まるで平行線のよう。

互いが死神、生き物という存在であるかぎり、決して決して交わらない。

彼と、死神さんと、いつもでもこうして過ごしたい。

ずっと、一緒にいたい。

過ぎすうちに恋をして、時々喧嘩もして、笑って泣いて。そうあれたら、どれだけ幸せか。

でも、そうあれる日は、この先ずっとないのだろう。

「始まりがあって、終わりがある。

それがどんなに幸せなことか、生き物には理解できないんだろうね」

嗚呼。

終わりがあることが恐怖。

私にしたって、死ぬのは嫌だった。

私が死んだと告げられたとき、理解しても頭では納得できなくて。友達や家族に二度と会えないのが嫌でたまらなかった。

小さかったとき、ペットのハムスターが死んでしまったことがあった。

あの時もとてもとても悲しかったのを覚えている。

どうして生き物って死んじゃうの？って何度も泣いた。

死なんてこなければいいのにとずっと思っていた。

だけど。

「・・・はい。でも、死神さんが言うんなら、きっとそれは幸せなことなんでしょうね」

死神さんが言うのなら、きっとそう。

終わりの無い人からすれば、終わりのあるほうがずっとずっと幸せなんだ。

永遠であることのつらさが分からない私にとってはその言葉も、

死神さんが言うから信じる、ということしかできないんだ。

「唯」

いつもの声で名前を呼ばれる。

その響きに、いつまでも酔いしれていた。

けれど、そももいかない。

「はい」

「俺、唯が転生しても、唯のことは絶対忘れない。約束する」

その時見えた死神さんの目は、死神としての目じゃなかった。人として、1人の人間としての目。

私はやっぱりそんな死神さんが好きだ。

綺麗な顔立ちで、まるで仙人みたいで、でもどこか抜けている、きつとこれほどまでに死神に向いていない人は居ないっていうくらいに優しい、

右目に泣きボクロのある死神さん。

私は、彼が好きだ。

「私も」

顔を上げて、死神さんの視線にあわせる。

優しいなその黒い目は、無垢に私を見る。

無性に、泣きたくなるけれど、気持ちをぐっところえて、言葉を紡ぐ。

「私も、忘れません。忘れたとしても、必ず思い出します」

死神さんを憶えてくれる人がいないのなら、私かなろう。
たとえ忘れてしまっても、かならず思い出すから。

ここに来るたび、死神さんを見るたび、かならず思い出すから。

「うん、約束。絶対、絶対、俺のこと見たら思い出してね」

はい。絶対、思い出します。

だから、悲しそうな顔、しないでください。

泣きそうな顔、しないでください。

「死神さん」

こうやって笑いあえる日が、また来ますように。

(やつと約束、守れましたね・・・ 死神さん)

(後書き)

変わり者の亡者と俺の唯verです。

唯にとっての愛し方と死神にとっての愛し方。

決して同じ時を生きられない二人の愛のカタチは記憶というもの。
忘れる側も忘れられる側も同じように辛く苦しい。

そういうことを感じていただければ幸いです。

ちなみにタグにハッピーエンドとバッドエンド両方つけたのは
見る人からみればこの終わり方はハッピーにもバッドにも
なりえると思っただからです。

あなたはどちらだと思えますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6903g/>

泣きボクロのある死神さんと私

2010年10月11日01時49分発行